

<特集補遺：まえがき>

特集補遺：まえがき

Special Issue: Foreword

風間 伸次郎
Shinjiro Kazama

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

1. これまでの経緯と今回(26号)での方針について

2009年に『語学研究所論集』(以下『語研論集』)の「特集」が開始され、3年前に刊行した23号まで、10のテーマに関する特集が行われてきた。その内容を振り返ると、14号:受動表現、15号:アスペクト、16号:モダリティ、17号:ヴォイスとその周辺、18号:所有・存在表現、19号:他動性、20号:連用修飾的複文、21号:情報構造と名詞述語文、22号:情報標示の諸要素、23号:否定、形容詞と連体修飾複文、となっている。まだとりあげていない文法カテゴリーも多くあるが、性や数、名詞類別などの名詞の文法カテゴリーについては、これを持たない言語も多いので、通言語的なデータ収集には適していないと思われる。10年目(24号)と11年目(25号)、12年目(26号)では引き続き、これまでの特集でデータの得られなかった言語の補遺を集め、データ全体を揃えていくことを目指した。

2. 今回の時点でのデータの収集状況について

幸い今年度も競争的経費が認められ、今回も多くの補遺のデータを集めることができた。本学にある28専攻語のうち日本語を除く27専攻語について、今号でどのような言語のデータが集まったか、という点についてまず報告する。

英語、フランス語、ポルトガル語、中国語、朝鮮語、モンゴル語、マレーシア語、ラオ語、カンボジア語、ベトナム語、ビルマ語、ウルドゥー語、ペルシア語、アラビア語、トルコ語の15言語については、前号までですでに全データが揃っていた。そこに今号ではイタリア語に5特集分、ロシア語に3特集分、チェコ語に4特集分、タイ語に4特集分、ベンガル語に10特集分全部、ウズベク語に4特集分のデータが加わり、これら6言語については全特集分のデータが揃った。したがって現時点で21言語は全データがあることになる。

今号ではさらにスペイン語の1特集分(残りは2特集分)、ポーランド語の1特集分(残りは3特集分)、インドネシア語の1特集分(残りは1特集分)、タガログ語の1特集分(残りは5特集分)、ヒンディー語の6特集分(残りは4特集分)である。今回新しいデータは得られなかったが、ドイツ語で残るのはあと1特集分である。

27言語の10年分であるので延べ270あるが、今回の補遺で40特集分が加わり254特集分となり、残りは上記の16特集分である。特にゼロだったベンガル語、ヒンディー語のデータが加わったことの意義は大きい。いくつものデータをお願いしたイタリア語、チェコ語、タイ語、ヒンディー語では2人以上の先生/研究者/院生/学部生の方たちが分担して担当し、データを揃えてくださった。貴重なデータの収集に努力して下さった先生方、院生・学部生の方々、手配や依頼に奔走して下さった『語研論集』編集幹事の先生方、査読をして下さった先生方、補佐の深尾さん、謝金の円滑な運用に配慮して下さった事務の方々などの御尽力なしにはこうした成果は全く不可能だった。さまざまな方々の御協力に深く感謝申し上げたい。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

3. 今回収集されたデータの意義

3.1. 語族内部・語派内部での対照研究や類型的研究への発展

例えばフランス語、ポルトガル語、イタリア語のデータが出揃ったことは、印欧語族ロマンス語派における対照研究、さらにはロマンス語派の類型的性格の研究にとって極めて有効な具体的データになると考えられる。ロシア語、チェコ語に関しても同様であって、印欧語族スラブ語派の対照研究、類型的性格の研究に有用である。さらに両語派とも、スペイン語とポーランド語の残りのデータが揃えば十全な対照研究・類型的研究の基盤となるだろう。本学の学生や院生にとっても、自分の言語の勉強や研究において、同じ語族／語派の言語との対照を通じて自分の言語の状況を捉え直すことができれば、その視野は大きく広がり、より客観的に自分の専攻する言語をみるようになるだろう。さらにそればかりでなく、語族／語派の分岐の歴史やその地理的・文化的背景などについても視野が開かれてくることだろう。

ベンガル語・ヒンディー語・ウルドゥー語・ペルシア語のインド・イラン語派の諸言語のデータ、タイ語とラオ語によるタイ・カダイ語族のデータ、マレーシア語・インドネシア語・タガログ語のオーストロネシア語族のデータに関しても同じことが言えるだろう。

その点から考えて、今後ぜひ収集すべきはビルマ語やチベット・ビルマ語派を研究していくうえで重要なチベット語（諸方言）のデータや、スラブ語派やヨーロッパの印欧語族を研究していくうえで重要なバルカン半島の諸言語やケルト諸語のデータであろう。バルト諸語に関してはいくつかデータがあるので、これを拡充することも重要だろう。

今回は2特集分のみとはいえ、広東語のデータの得られたことも貴重である。上海語や閩南語（台湾語）であれば国内でも話者を見つけることは十分に可能であろう。もし漢語の7大方言についてのデータが揃えば、その対照を通じて漢語全体の特性や内部での異同を把握したり、橋本萬太郎の唱えた言語類型地理論に基づく漢語の南北差の検証を行うことが可能になってくることだろう。

3.2. チュルク諸語、アルタイ諸言語研究のデータ

今回はチュルク諸語について、ハカス語、タタール語、チュヴァッシュ語のデータが新たに加わり、トゥバ語やトルクメン語、キルギス語、ウズベク語についてはすでにくつかの特集データがあったところに新たなデータがいくつか加えられた。チュルク諸語は26ほどの言語を有する語族であり、なおハラジ語やサラール語など重要な言語のデータは欠けているが、このように語学研究所のデータがチュルク諸語の研究において一定の意味を持つデータの集積となりつつある。チュルク諸語、モンゴル諸語、ツングース諸語の3つのグループは、いわゆるアルタイ諸言語を形成する。3者の系統関係はなお明らかではないが、これにさらに日本語と朝鮮語を加えた言語は類型的にみて互いに良く似ていることが指摘されている（「アルタイ型言語」と呼ばれている）。モンゴル諸語に関してはまずハルハ・モンゴル語のデータが前回分揃っているのに加え、ダグール語のデータがあり、さらに今回はモンゴル語チャハル方言についてのデータが3回分加えられた。ツングース諸語についてもナーナイ語の全データがあり、ソロン語やエウエン語のデータもある。朝鮮語のデータも前回分揃っているため、このタイプの言語間での対照、類型論的研究にとって有用なデータがかなり利用可能になっているとすることができるだろう。もちろん今後さらに他のチュルク諸語やシロソグ・モンゴル諸語、シベ語、南北琉球諸語を含む日本語諸方言のデータなどの集積が進めば、このデータの総体の持つ意義はきわめて大きなものになるだろう。

言語学はもっぱら欧米の言語の研究が中心になって発展してきた。そのため用語や概念に関してもいまだ欧米の言語の記述に適したものに偏っている面が強く存在していることは否めない。日本人の言語研究者にとっては、日本語および日本語と類型的によく似たタイプの言語を研究し、その成果を言語学全般に還元していくことも重要な仕事の一つであると思われる。

3.3. 何らかの類型的なタイプに焦点を当てた研究の可能性

東南アジア大陸部には孤立型の言語の密集していることが知られている。本特集でデータが揃っている中国語、カンボジア語、ラオ語はそれぞれ語族は違うものの、まさにこの地域の孤立型声調言語である。さらに例えばアフリカ西部の孤立型声調言語のデータがあれば、系統や地域を超えたこのタイプの言語における類型的な類似点と相違点を探ることが可能になってくることだろう。

アラビア語とタガログ語のデータがあるので、さらにケルト諸語のデータがあれば、VSO 語順の言語の特性などについて研究することも可能になってくる。さらにはこうした VSO 語順に共通する言語特性を上記の SOV 語順をもつアルタイ型言語が共有する言語特性と比べてみるのも興味深い試みとなるだろう。

データの収集はあくまでも第 1 段階であり、ある程度の収集ができてきた現在、今度はそれらをどのような切り口からいかにかうまく活用していくか、ということが第 2 段階における重要な課題となってくる。

3.4. エスペラント語、パピアメント語のデータの意義

前号で 2 特集分のデータが加わり、今号でさらに 2 特集分のデータが加わったパピアメント語はカリブ海のいわゆるクリオール言語である。今号で全特集分のデータが加わったエスペラント語はもちろん言わずと知れた人工言語である。ピジン・クリオールの言語の研究は言語の起源や原初的形態の研究にとって重要とされており、人工言語とともにこうした言語のデータは他の一般的な言語のデータとは異なる特別な価値を持っていると考えられる。

今後はさらに手話言語など、もっと違った次元の言語のデータが加わることも人間言語の一般言語学的解明においては意味のあることと思われる。

4. 今後の課題

系統や地域に偏らないデータが類型論的な研究にとってきわめて重要であることはいままでの「特集」のデータには、(毎号書いているが) まず地域的にみれば新大陸の言語やオーストラリア先住民の言語、ニューギニアやカフカスの言語などのデータが今なお皆無である。したがってこれらの言語のデータの収集がもっとも重要な課題である。日本国内にも中南米のインディオの言語の話者はある程度いらっしやるに違いない。したがってぜひあと 1 回分のスペイン語のデータを揃え、ポルトガル語のデータとともに今後中南米の諸言語を調査するための貴重な調査票として有効に活用していくことが必要である。

アフリカの諸言語については、前号でグイ語の全特集分のデータが加わったが、中川裕先生をはじめとするアフリカの言語の専門家の方からさらなる協力が得られる見通しがあり、次号ではアフリカの言語のデータの増加が見込めそうである。

語族の観点からみると、ドラヴィダ語族やチュクチ・カムチャツカ語族など、大きな語族でありながら現時点ではデータのない語族の諸言語が残されている。オーストロネシア語族やウラル語族の言語データの拡充も目指すべき目標の一つだろう。ニブフ語やブルシヤスキー語、アイヌ語など、系統的に孤立した言語のデータの収集も重要な課題である。1 つか 2 つの特集のデータしかない言語も含めれば、現在 60 強の言語のデータが集まっている。世界の言語は 6,000 とも 7,000 とも言われているので、例えば何年かの後に 600 や 700 のデータがここに集積されれば、それは真に類型論的な研究に堪えるデータとなってくるだろう。

一方で、この『語研論集』の特集で収集されたデータを、言語と項目から自在に検索するシステムも作成中である。これは語学研究所の HP で現在「語研論集データベース」として公開されている。この 26 号が刊行される時点にはこれまでの 9 特集分のデータがこの形で公開される予定になっている (15 号のデータのみ、まだ間に合っていないが、これも早晩公開できるだろう)。ただし、まだグロスは一不統一な状態である。

記述言語学や対照言語学、言語類型論の研究にとって有益なものとなるだろうという考えから、試行錯誤しつつ、このような「特集」データの収集を続けてきた。収集のプロセスにおいて、調査票の例文における問題点がいくつか明らかになってきた面もある。さらに我々が気付いていない問題点や、目指すべきより良い形、収集すべき別の重要なデータなどがあるという可能性は十分に考えられる。読者からの御教示、御批判御叱正等をいただければ幸いである。何語のどの特集でもかまわないので、たとえグロスなしでも新しい言語のデータの提供を申し出ていただければ大変にありがたい。ならびにこの「特集」と「語研論集データベース」の収集・作成・活用等に関して、建設的なアイデアをぜひお聞かせいただきたいと考えていることをお伝えして、この「まえがき」の筆を置くこととする。